

## 書評・北原糸子著『震災復興はどう引き継がれたか 関東大震災・昭和三陸津波・東日本大震災』

2023年で1923年9月1日に発生した関東大震災（大正関東地震）から100年を迎えた。今年1月に刊行された災害史研究の第一人者である北原糸子著『震災復興はどう引き継がれたか 関東大震災・昭和三陸津波・東日本大震災』（藤原書店）は、震災復興の歴史的経緯を縦横に検証した512頁の大著で時宜を得たものである。

2011年に発表された著者の『関東大震災の社会史』では、自然災害（地震）のもとでの避難者、犠牲者、罹災者などの人たちに焦点をあてて、それまでの類書にはない視点で震災の社会問題を抉り出した。本書ではタイトルにあるように震災復興という視点から関東大震災の姿を検証した。本書は三部構成となっており、第Ⅰ部「近代復興」の起点・継承・その終焉－関東大震災・昭和三陸津波・東日本大震災、第Ⅱ部 関東大震災の社会史（2011年著書の再掲）、第Ⅲ部 関東大震災・資料編、がその内容である。

本書の基本的な注目点は、関東大震災という災害の実像と復興のプロセスを単体で検証しようとしたものではなく、1923年以降に発生した1933年昭和三陸津波と2011年東日本大震災を取り上げて時系列の比較のなかで復興の課題を浮かび上がらせようとしたことである。このような切り口からのアプローチはこれまでなかったものであり、災害史の研究者としての著者の立ち位置が明確に示されている。

次に、震災復興のプロセスを都市計画との関連で検証しようとしたことが二つ目の注目点である。都市計画との関連で復興事業のプロセスを検証することは、これからの自然災害への対応を考える上で極めて重要である。著者が本書のあとがきで、都市計画の窪田亜矢を引用して「都市計画における「復興」の目的は、事業として土地を造成し建物や社会基盤などを建設した空間で実現される人々の生活活動が期待されるという合理的な目標像を持ち、その実現が可能だとする信念に基づいて事業を推進する。しかしながら、前者は事業で実現できるが、後者は必ずしも実現するわけではないことが、東日本大震災で明らかになった」（485頁）と指摘した点は、経済学の「合成の誤謬」にも通じており、重く受けとめるべきである。

著者の災害史研究の蓄積によって培われた知見は、21世紀の防災・減災のあり方を考えていく上で貴重な糧となるだろう。なお、著者の2021年の『震災と死者 東日本大震災・関東大震災・濃尾地震』（筑摩書房）も併せて読まれることを薦めたい。

（神奈川大学名誉教授 佐藤孝治）

